

韓国獣医学系大学・研究所の現況

早崎峯夫[†] (山口大学名誉教授)



1 はじめに

先ごろ、国立畜産科学院本院 (National Institute of Animal Science, RDA, 京畿道水原 (Suwon) 市), ソウル大学校獣医校 (Seoul National University, College of Veterinary Medicine, 京畿道ソウル (Seoul) 市), それに忠南大学校獣医校 (Chungnam National University, College of Veterinary Medicine, 忠清南道, 大田 (Daejeon) 市) を訪問したので、最近の韓国獣医界の活動ぶりを紹介したい。

2 国立畜産科学院

国立畜産科学院は1952年5月に国立家畜技術センターとしてスタートし、1994年12月に国立家畜育種研究所と国立家畜実験研究所を統合して国立畜産研究所に改組され、その後2度の改組を経て、2007年6月に、現在の名称で設立された。研究組織は、京畿道水原市の本院にある家畜生物学・環境研究部 (5研究課) と韓国中西部の忠清南道の天安市にある畜産資源開発部 (6研究課) の2つの研究部を中心に、韓国北東部の江原道江陵市にある韓牛 (Hanwoo) 研究支場及び韓国南西部の全羅北道南原市の家畜遺伝資源研究支場から成り立っている。

この本院はソウルから南に約40kmのところであり、韓国を代表する国立研究機関の1つで、約1,300万m²の広さを誇り、敷地内の本部前庭や研究施設、畜舎や見渡す限りの広大な放牧場も実に良く手入れが行き届いており、清潔感溢れる研究施設であった。

ここでは家畜遺伝学、家畜栄養学、家畜飼養学、飼料作物学、食品科学、家畜衛生学など畜産学全般にわたる研究が行われている。

現在進められている研究課題は、韓国特産の赤毛の肉牛種である韓牛 (Hanwoo) の霜降り肉質を向上させる遺伝子の解析、遺伝子組み換え豚によるヒトエリスロポイエチン産生と製剤化、クローン韓牛の繁殖向上と食の安全性の解析及び腹壁装着人工窓からの第一胃内容物の継続的採取法によるルーメン内醗酵の分析と肉質の改良などに関するものである。

内外の訪問客のために、“21世紀のための研究”をコンセプトに、カラフルで分かりやすい説明にアレンジされた多くのパネルや数々の模型が陳列されている立派な展示館が併設されていて、ここで説明を受ければ韓国の畜産研究の全容が一目瞭然で分かるようになっている。展示館には英語に堪能な女性職員も配置されており、韓国の畜産研究と食の安全を守っている中心的機関の面目躍如といった感を強くした。また、展示物の中には、この研究所の前身で、朝鮮総督府時代の勸業模範場であった頃の、「朝鮮総督府報告書、1912年」(朝鮮総督府勸業模範場報告第7号、1913年(大正2年)に掲載)や、「朝鮮総督府勸業模範場 大正12年度(1923年)事業設計書纏」などが大切に保管・展示されていた(図1)。

この大正12年というのは、日本では獣疫調査所独立官制の公布(大正10年)、家畜伝染病予防法の公布(大正11年)、そして農林省畜産局の新設・家畜衛生課の設置(大正12年)とわが国の畜産行政が確立した時期に当たり、同時に朝鮮総督府による朝鮮半島の獣疫・畜産研究が一段と充実していった時期でもある。

明治末期から先の大戦までの日本による韓国支配の歴史を知っているだけに、このような日本語で書かれた当時の行政資料の展示を複雑な気持ちで見ざるを得なかった。しかし、当時、現場の日本人研究者も韓国人研究者も朝鮮半島の家畜防疫や畜産振興のために共に手を携えて協力して必死に研究したということ为先人から聞いて

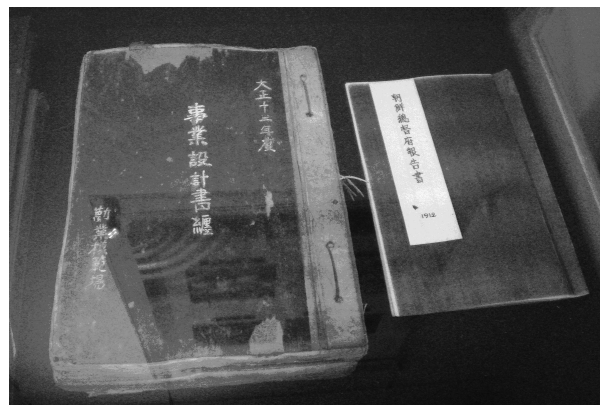


図1 展示室にて、右 朝鮮総督府報告書(1912)、左 朝鮮総督府大正12年度事業設計書。

[†] 連絡責任者：早崎峯夫

〒190-0001 立川市若葉町2-26-8

E-mail : tachikawa_hayasaki@yahoo.co.jp

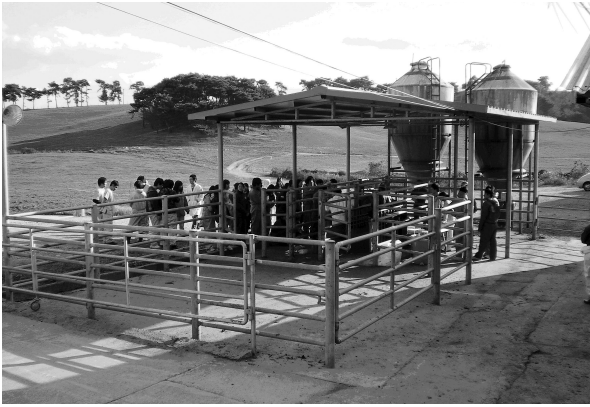


図2 国立畜産科学院（本院）の広大な放牧地と大動物実習風景



図4 ソウル大学校獣医校附属動物病院正面玄関前



図3 柳室長の研究室にて（右から、柳 一善室長，筆者（背中），張 龜准教授，李 仁炯准教授）



図5 ソウル大学校獣医校玄関ホールにて（右より、李 仁炯准教授，筆者，木村順平副教授）

いるだけに、韓国の人は韓国人による畜産研究の学術的歴史の一部としてプライドを持って展示しているものと思えた。先の敗戦で日本軍は韓国からの退却に当たって軍事資料のみならず研究資料までも徹底的に破壊焼却することを朝鮮総督府が管轄する様々な分野の研究所に命令してきた。そのため、現場の研究者たちは長年積み重ねてきた研究データの一切合財を泣く泣く焼却したものだということを、当時を知る先人に聞かされていただけに、これらの資料がよくぞ残っていたのだと感心させられた。

ここ本院の獣医研究官で、当科学院の諮問委員も併任している、家畜診療研究室の柳 一善（RYU Il-Sun）室長が私と面会してくださった。柳室長は韓国牛病学会の総務理事で、以前日本で開催された日韓牛病学会で一度お会いした。20数年前北海道大学獣医学部に1年間留学した経験をもつ、大変気さくな方である。訪問した日にちょうどソウル大学校獣医校の6年生約40人が大動物実習の野外授業のために教員達の車とマイクロバスに分乗して来所していた。柳室長が私を学生たちに紹介してくださったこともあって、農場内牛舎で内視鏡手術

の実習を学生と共に見学させてもらうことにした(図2)。

手術指導兼引率の准教授の方と手術補助者となった学生たちは一所懸命作業して、半分の学生はそれを見学し、残りは周辺で談笑していた。日本での大動物実習の学生風景と同じで、どこの国でも大動物実習風景は同じだと、つい思わず失笑してしまった。実習終了後、柳室長、ソウル大学校の蔡 俊錫（CHAE Joon-Seok）副教授（内科学）、李 仁炯（LEE In-Hyung）准教授（外科学）、張 龜（JANG Goo）准教授（臨床繁殖学）と歓談（図3）の後、一緒にソウルに戻り、李准教授にソウル大学校獣医校を案内していただいた。

3 ソウル大学校獣医校

ソウル大学校は2つのキャンパスから成り、ソウル市（人口1千万人）南部の冠岳区キャンパスに大学本部、人文、社会、理、経営、工、農、美術、法、教育、人間科学、獣医、音楽、薬の各カレッジがあり、同市北東部の大学路通りキャンパスには医、歯、看護、大学病院をもつ総合大学である。冠岳区キャンパスの正門にはソウル大学校のハングル文字の頭文字を芸術的にデザインし



図6 忠南大学校獣医校附属動物病院正面玄関前
(宋 根鍋准教授と筆者)



図7 大田市中心街の動物病院

た白いモニュメントがそびえている。ソウル大学獣医校はこの正門から見て左奥に位置しており、動物病院（図4）が獣医棟の横に併設されていて、臨床系講座は動物病院に入っている。水原市より到着した時は夜の6時を回っていたが、動物病院待合室には順番を待つ飼い主とペットがまだ座っていた。この日が特別に患者数が多かった訳ではなく、いつもの診療風景ですと、案内してくれた李 仁焯准教授は言っていた。病院内を案内していただいたが、外科診療科だけでも麻酔科、眼科、軟部外科、整形外科、放射線外科の診療科に分かれ、顕微鏡手術装置、CT、MRI、広く使い勝手のよい手術室など最新装備が設置されていた。内科診療科でも、いくつも並ぶ問診室の奥には6台もの処置台が並ぶ広い処置室があり、院生や高学年学生がきびきびと働いていた。李准教授は、帯広畜産大学に大学院学生として留学し、博士号を取得した後、アメリカに渡りテキサス大学の医学系研究所で数年間麻酔薬の動態研究を修めてきたという。李准教授は外科講座に属し、動物病院では麻酔科医として診療に従事している。現在、韓国の獣医校附属動物病院で麻酔科を正式診療科として設置しているのはソウル大学校獣医校のみである。ソウル大学校の各カレッジでは、教員の1/3はソウル大学校出身者以外から採用しなければならないことが規則で決まっており、また数年前からは女性も採用しなければならないことも規定され、現在獣医校では1名の女性准教授が就任している。教員の国別学位取得先は、米国50%、日本25%、その他の国25%となっている。

ソウル大学校獣医校の解剖学講座に着任されたばかりの前日本大学獣医学科の木村順平博士にも会うことができた（図5）。木村先生（現解剖学講座副教授）はソウル大学校獣医校のみならず、韓国の全獣医校の正規教員の中で唯一の日本人である。解剖授業を英語で行っているが、ご自身は学内に開講されている外国人教員や留学生

のための韓国語会話のオープン講座にほぼ毎日出席し韓国語を習っていて、訪問した際もちょうど会話授業を終えて自室へ戻ってきたところであり、授業と研究と韓国語の勉強で毎日が忙しくてしょうがないと生き生きとした顔で明るく言っておられたのが実に印象的であった。

4 忠南大学校

忠南大学校は忠清南道大田市にあり、大徳キャンパスと宝雲キャンパスに分かれている。大徳キャンパスは広大な敷地を持ち、構内には、大学本部、人文、社会、理、経営、工、農、法、薬、家政、芸術、獣医、生命科学の各カレッジがあり、宝雲キャンパスには医科カレッジ、大学病院がある。獣医校の教員数は教授12名、副教授5名、准教授5名の22名で、そのうち9名が臨床系教員（内科2名、外科2名、臨床繁殖2名、臨床放射線2名、臨床病理1名）で、教員規模は必ずしも大きくない。学位の国別取得先は韓国内15名（ソウル大学校7名、忠南大学校4名、その他大学校2名）、米国4名、日本2名、オーストラリア1名となっている。案内してくれた宋根鍋（SONG Kun-Ho）准教授（図6）は8年前に日本獣医師会の国際獣医師育成研修事業の研修獣医師として1年間山口大学の私の研究室に滞在した方で、現在内科の臨床教員としてまた韓国の犬糸状虫症の専門家として活躍している。案内していただいた動物病院はソウル大学動物病院の規模に比べれば一回り小さいが、CT、MRIをはじめ一通りの設備は完備していた。また、一般臨床検査室とともに感染体専用臨床検査室も設置されており、感染症に対応できる態勢を整えて少しでも他校と異なる自校の特色を出そうという努力の一端が伺われた。

なお、大田市（大田広域市ともいう）は人口150万人の都市であるが、約100の動物病院が開設されていて飽和状態にあるという。このため、約70%の病院は経営が苦しい状態にあり、閉鎖する病院も少なくない。しか

も、このところの世界的金融危機の影響で、さらに厳しさに拍車がかかっている。そのような事情のためか、市中心街に開設されていた病院の外壁はひと目で動物病院と分かる、ひと目をひくようなレイアウトが施されていた(図7)。国内の犬対猫の飼育頭数はおおむね9対1であるが、最近、犬の飼育頭数は横ばい状態にあり、猫の飼育が増えている。その理由として、犬はうるさいので嫌われる傾向にあり、猫は静かだから好まれているのだそうだ。本当だろうか。

5 韓国の獣医学教育

韓国の獣医校は国立校9校、私立校1校の合わせて10校ある。国立大学校で獣医校をもつのは韓国北西部の京畿道のソウル大学校(韓国では大学は大学校と称す)、中西部の忠清南道の忠南大学校と忠清北道の忠北大学校、南西部の全羅北道の全北大学校と全羅南道の全南大学校、北東部の江原道の江原大学校、中東部の慶尚北道の慶北大学校と慶尚南道の慶南大学校、済洲島の済洲大学校の9校である。私立では建国大学校に獣医校(ソウル市)が設置されている。一学年の学生定員は国立校が40名、私立校が80名であり、年に440名が卒業し、獣医師国家試験を受けるが、国家試験は年々難しくなっている。卒業後、臨床希望者はほとんどが小動物へ進み、大動物希望者は極めて少ない。ちなみに昨年のソウル大学校獣医校では卒業後、小動物へ進んだものは1/3、進学が1/3、公官庁・製薬会社研究所が1/3であり、大動物はわずかに1名であった。韓国におけるこのような小動物臨床への偏重とその裏返しとして産業動物や公衆衛生への希望者の減少という近年の傾向は、韓国獣医界の深刻な悩みの種となっている。

韓国での教員の名称は、Professorは(正)教授、Associate professorは副教授、Assistant professorは准教授(または講師)に相当する。教員の昇格審査は徹底した成果主義に則っていて、Assistant professorに採用されてから4年後に業績審査がある。審査は執筆論文数を基準に判定され、ファーストオーサーかコレスポンスオーサーになった論文のみがカウントされ、それ以外は共著者に名前を連ねていても業績としてカウントされない。しかも、審査基準にはSCI格付け学術雑誌リスト(Science Citation Index Expanded Journal List)に収載されている学術雑誌に掲載された論文の最少必要数とその他の雑誌に掲載された論文の最少必要数は別々に規定されている。臨床系教員は、診療業務への貢献が考慮された審査基準になっていて、どの獣医校でも、基礎系教員と臨床系教員の審査基準は別々で二本立になっている。なお、審査基準は大学校の裁量で決められるため大学校ごとに多少差異がある。忠南大学校ではこの基準が2年ごとに見直され、そのたびに難しくな

っている。准教授に採用されて4年後にこの基準を満たしていないときは大学を去らねばならない。基準を満たして副教授になると5年後に業績審査があり、それをパスして晴れて教授に昇格する。ただし副教授の教授昇格審査では、この5年間に所定の基準を満たしていない時は1年間の猶予期間がもらえるが、この1年間に所定の基準を満たせない時は大学を去らねばならないことになっている。例えば、忠南大学校獣医校の現在の条件は、准教授の副教授への昇格審査では、臨床系教員の場合、SCI認定の国際的学術雑誌に掲載された論文2編以上でかつ韓国国内雑誌に4~5編以上の計6~7編以上が最低条件となっている。

研究論文の投稿を奨励するために、投稿した学術論文が審査をパスして刊行されると報奨金がもらえるという制度になっている。また、国の科学研究補助費を含めて、外部研究資金を獲得しても金額に合わせた報奨金が得られる。国立獣医校ではその報奨金の制度と金額はおおよそ同様の基準になっていて、例えば、SCI格付け学術雑誌に掲載されると1編につき日本円に換算して約10万円が、それ以外の雑誌では約7万円が個人に支払われる仕組みになっている。私立の建国大学校でのそれは1編40万円である。また、外部研究資金を1千万円獲得できたとすると、学校はそれの10%を天引きして、しかもそのうちの3%は獲得した教員個人に報奨金として与え、残りの7%は学校が積立てておき、国際学会に発表した時の旅費の補助金や前述の学術雑誌掲載の報奨金の原資として使われるようになっていく。例えば、昨年の場合、米国シアトル出張では日本円に換算して12万円、米国東部だと16万円、アジアは8万円という。これらの報奨金は何の使用条件もなく、全く個人の裁量に委ねられており、報告義務もないというのだから、この韓国式成果主義の徹底ぶりには驚かされた。

教員の組織構成も、すでに大講座制に移行していて、規則に則って講座内の研究教育を等しく分担しさえすれば、上下関係に煩わされることなくのびのびと自分の研究環境が確保できる。准教授クラスの若い先生は誰もが自信を持って今の制度が良いと話していたのが印象的であった。

6 おわりに

韓国でも国立獣医校再編の話が持ち上がっていて、現在の10校を3ないし4校に合併するのが良いと多くの人々が考えている。しかし、獣医校は、日本同様、受験生に大変人気があるので、合併するにしてもどの獣医校も自分のところが主体になるのはいいが吸収されるのはいやだと言って、膠着状態にある。また、大学校の法人化の話も上がり始めているが、あまり盛り上がった議論にはなっていない。ただ、大学校が法人化して生き残ることができるのは現状ではソウル大学校だけではなかろうか

と、ソウル大学校の教員が言っていたことは興味深かった。しかし、これまで国は教育行政に国費をつぎ込んで教育先進国化に力を入れ、大学校は潤沢な研究費を背景に国際競争力をつけてきた。法人化によって国からの大学校予算が削られ、大学校独自の努力で研究費を獲得し

ていかねばならないことになった時には全国の大学校は混乱に陥らなければよいと思う。韓国でもいずれは大学校法人化が避けて通れない道であろうと思うだけに、いまやわが国の大切な隣人である韓国には遅しく乗り切ってもらいたいものである。